

Title	リカード才直後に於ける其の分配理論に対する英国経済学者の修正意見
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.5 (1935. 5) ,p.687(77)- 728(118)
JaLC DOI	10.14991/001.19350501-0077
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350501-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を論じてゐるのであるが、あまりに長編となることを恐れて、割愛した。しかし、これまで紹介した部分においても、吾々は、シュテルンベルヒの著述の最も特徴的なものを見ることが出来るのである。念のために書いて置くが、この文章には筆者の意見は少しも混合されてゐない。

一九三五・四・一六 稿了

リカード直後に於ける其の分配理論 に對する英國經濟學者の修正意見

高橋 誠一郎

デヴィッド・リカードの『經濟原論』が出版せられた一千八百十七年から、ジョン・スチュアート・ミルの『經濟原論』が現れた一千八百四十八年に至る英國經濟學史上の三十年間は、大體に於いて、新原理の發見よりも、寧ろ先人の所説を祖述するを以つて其の任務と爲せる第二流の經濟學者によつて占領せられた時代と稱せられてゐる。(昭和四年版拙著『經濟學史』二二三頁参照)。洵に此の期間を通じて、リカードの理論は長く經濟思想界に君臨して居つた。而も、吾人は此の時代に於いて、彼れの學説の或るものが、一方に於いては、此の國の非資本主義者並びに社會主義者に對して眞に有效なるインスピレーションを與ふると共に、他方に於いては、是れ等のものゝ修正を主張する専門經濟學者を出しつゝあつたことを記憶しなければならぬ。吾人は曩きにリカード學徒の價値學説に

對するマルサス、トレンズ及びサミール・ペーリイ等の所説を一瞥した。(前掲拙著一七五—一八五頁及び二〇六—二二三頁)。爰には暫く彼れの分配理論、利子、地代及び賃銀論に對する修正意見を觀んとする。而してそは主としてマルサス、ジョンズ及びシイニョアによつて行はれた事業である。吾人は先づ利子學說に就いて述べる。

二

アダム・スミスは何等特色ある利子學說を表明しなかつた。而も、衝突を來しつゝある後世の殆んど總べての理論は其の萌芽を彼れに於いて看出される。彼れは利子の泉源を以つて、或ひは勞働の創造せる價值以上に産物に對して與へられた増加價值であると做し。(Wealth of Nations, vol. I, 1776, pp. 57-58.)、或ひは是れを以つて、勞働によつて創造せられ、資本によつて抑留せられたる價值の一部と觀た。(ibid., pp. 79-80.)。彼れの態度は全然中立的であつた。然しながら、資本の發達並びに社會階級の分裂、資本及び勞働の對立は臆がて中立をして不可能ならしめた。(Eugen von Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalzins, Erste Abteilung, Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien, 4 Aufl., 1921, S. 65-67.)。

勞資對立の理論はリカードによつて明確に表明せられた。彼れは英國學者の大多數と等しく資本に對する利子と企業家の利潤との間に何等の區別を設けるとなく、「利潤」なる名辭の下に兩者を類集した。彼れは夫れ夫れ地主及び勞働者によつて取得せられ得る土地、勞働及び資本の結合産物に於ける配分を説明して、殘餘請求者として資本家を取扱ひ、之れに割當つるに殘存せる所のものを以つてした。リカードに取つては、利潤は協力しつゝある

地主及び勞働者に對して支拂はるゝ地代及び賃銀の高を控除せる全産物である。彼れは注意を無地地代、即ち限界的土地及び資本の無地代的適用に向くるによつて其の問題を更らに一層單純ならしめ、斯くて地代を計算より排除し、而して協力しつゝある勞働者に支拂はるゝ賃銀を控除せる無地地代及び無地代資本の産物として利潤を説明する。産物から賃銀を差引いた殘餘は利潤に歸する。即ち利潤の割合は賃銀の下落と共に増加し、賃銀の上騰と共に減少するが故に、賃銀に依存する。而して賃銀が穀物の騰貴と共に騰貴す可きであるならば、利潤は必然下落するであらう。(Principles of Political Economy, and Taxation, 1817, p. 117.)。社會と富の進歩と共に、所要の食料の附加的定量は愈々多くの勞働の犠牲によつて取得せらるゝが故に、利潤の自然的傾向は下落に存するのである。斯くの如き利潤の傾向は、吾人をして從來要せられた勞働の一部を廢棄し、斯くて又、勞働者の最も重要な必要品の價格を低下するを得せしむる農業技術上に於ける發見により、又必要品の生産と關聯せる機械に於ける改良によつて幸にして屢々妨止せられる。(ibid., pp. 133-134.)。然しながら、リカードの見解に據れば、這般の改良及び發見は利潤低下の傾向を妨止するが、除去するものではない。是れにも拘らず、利潤は下降す可きであるが、而も是れ等のものゝ行はれざる場合の如く、さまで急速に下降せざるだけのものである。而も利潤が減少して皆無と爲る久しい以前に於いて、蓄積の動機は存せざることゝ爲らなければならぬ。利潤は農業家及び工業家の勞苦及び危険に對して適當なる賠償を與ふるに足るものでなければならぬ。(ibid., p. 136.)。

然しながら、リカードは、資本家の受くる利潤を以つて、他の協同者、殊に賃銀勞働者の損失に於いて取得せ

らるゝものに非ずして、特殊の餘剩價值より支拂はるゝものと觀た。蓋し、彼れに従へば、相異なる利潤の要求は、其の生産に比較的大なる資本の参加を要せる財貨が比較的高き交換價值を取得するの事實によつて平等化せらるゝが故である。(前掲拙著一四三—五頁参照)。斯くて彼れの勞資對立の理論は資本主義的修正を承認せしめられたのである。

洵にリカードは斷じて所謂勞働價值説の徹底せる主張者ではなく、貨物の生産に投入せられた勞働量は其の相對的價值を支配すると做すの原理が機械及び他の固定的持續的資本の使用に由つて著しく變更せしめらるゝことを認めて居つた。(Principles, op. cit., pp. 22-42)。然るにジェームズ・ミル及びジョン・ラムゼー・マッカラック等の如きリカードの直接後繼者は、價值を以つて全然勞働量に依つて定まるものと做し、而して資本其の者も亦、勞働を通じて存在するに至れるものであつて、一切の生産費は唯り勞働のみに廻り得るものであると觀じ、資本財其の者が生産せらるゝ勞働の賃銀として利子を説明した。(James Mill, Elements of Political Economy, 1821, p. 72; McCulloch, Principles of Political Economy, 1825, p. 250.)

三

然るに他方に於いて夙にローダデール卿は其の An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth and the Causes of its Increase, 1804. に於いて、ピーム・バヱークの所謂「間接生産力説」の一種を主張した。(「間接生産力説」(Die motivierten Produktivitätstheorien)は、利子の究竟の基礎を資本の生産力に置くの點に於いて、所謂「素材なる生産力説」(Die naiven Produktivitätstheorien)と一致するものであるが、而も餘剩價值が產物の増加量と結紮せらるゝを以つて自明と觀ずして、其の然らざるを得ざる所以を提示せんとするものである。然しながら、其の理由は諸學者によつて相違する)。彼れ曰く、資本が利潤を生ずるやうに使用せらるゝあらゆる場合に於いて、資本が使用せらるゝに非ざれば人間の手によつて遂行せらる可き勞働の一部分を、そが取つて代るか、若しくは、人間自らの努力を以つてしては仕遂ぐる可き能はざる勞働の一部分を、そが遂行するかの孰れかによつてそは一様に發生すると。(ibid., p. 161; 2nd ed., p. 155.)

ローダデールの意見はマルサスによつて繼承せられた。彼れ曰く、「前以つて集められた機械、食料及び原料の勞働に對する一定の前拂ひによつて、彼れが斯くの如き助力なくして仕遂げることの出來た仕事の八倍若しくは十倍を仕遂げることが出來るとしたならば、是れ等のものを供給した人は、一見した所では、助力を受けざる勞働の力と斯くの如く助力せられた勞働の力との間の相違に對して權利を與へらるゝの觀があるかも知れぬ。然しながら、貨物の價格は其の内在的效用に依頼せずして、供給及び需要に依頼する。増大せる勞働の諸力は自から増大せる貨物の供給を生ぜしむ可く、其の價格は從つて下降す可く、而して前拂ひせられた資本に對する報酬は直ちに、現存社會状態に於いて、其の生産に是れ等のものが適用せられた貨物を市場に齎すが爲めに必要なる所のものまで引下げらる可きである。使備せられた勞働者に關しては、彼れ等の努力も彼れ等の熟練も、必然彼れ等が助力を受くることなくして勞作する場合よりも甚しく大ならざる可きが故に、彼れ等の報酬は従前と殆んど同一なる可く、又、

需要及び供給によつて平常の方法に於いて見積られた彼れ等の貢獻せる労働の種類の交換價值に全然依頼す可きである。斯くてアダム・スミスの述ぶるが如く、労働の所産からの控除として資本の利潤を叙するは十分に正確ではない。そは労働者の寄與と正確に同一の方法に於いて見積られた資本家によつて寄與せられた生産の部分に對する公明正大なる報酬に過ぎない」と。(Principles of Political Economy considered with a view to their practical application, 1820, pp. 80-81.)

四

這箇「間接生産力説」が、利子を以つて資本家によつて提供せらるゝ労働に對する賃銀であると説く前掲ジェームズ・ミル及びマッカラク等の「労働説」と對立しつゝある間に、利子を以つて何等經濟的基礎を有することなく、單に労働者より搾取せるものに過ぎずと做す別箇の學説は既に主張せられて居つた。チャールズ・ホールは其の The Effects of Civilisation on the People in European States, 1805. に於いて、労働が富の唯一の泉源たることを信じ、地代及び利子が勞苦の報酬から不正に控除せられたものであることを主張した。(Ibid.; republished in J. M. Morgan's Phoenix Library, 1850, p. 94.) 「ロバート・オーヘンの流を汲める協同組合的社會主義者」ウィリアム・トムサンは其の An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth most conducive to human Happiness, 1824. に於いて、現在の社會狀態の下に在つては、労働者は、生産の資料を所有し而して之れを其の使用に委する者に對して其の收益の一定部分を提供しなければならぬのであるが、資本主が彼れに貸與した生産資料

の使用に對して要求する生産者の労働の割合は頗る大であつて、眞の能働的生产者は其の報酬の大部分を剝奪せらるゝと説いた。(Ibid., p. 164.) 而して「ウィリアム・ゴッドウィンの傳統を奉ずる哲學的無政府主義者」トーマス・ホッジスキンは其の Labour Defended against the Claims of Capital, 1825. に於いて「蓄積せられたる労働」として資本を叙することは決して資本家による餘剩價値の吸収を辯明するものではないと主張した。蓋し資本は労働が之れに適用せらるゝか、若しくはそが労働に適用せらるゝに非ざれば、何物をも生産することなく、又資本家其れ自身は之れをして生産的ならしむるに於いて何等の勤務をも遂行することなきが故である。彼れにして若し手若しくは頭腦によつて勞作するならば、彼れはあらゆる他の労働者と等しく彼れの産物に對して權利附けられる、然しなから單純なる資本の領有は労働者の産物の配分を受く可き何等の權利をも與ふるものでない。ホッジスキンは、利潤が存するに非ざれば、又利子が存するに非ざれば、蓄積及び改良に對する何等の動機も存するとなかる可しと做すの意見を以つて、労働より生ずる結果を資本及び節約に歸するに由つて起る誤りであると做し、個人及び國民の累進的改善を確保する最良の手段を以つて、労働に與ふるに其の收益の全部を領有し、享有することを以つてするに在りと論じた。(Ibid., ed. 1922, with an introduction by G. D. H. Cole, p. 109.) (『三田學會雜誌』第二十六卷第十號所載拙稿「賃銀學說史上の收益説」五〇〇—五〇一頁參照)。

斯くの如く、ホッジスキンの其の一千八百二十七年の著に題したる Popular Political Economy. 即ち「プロレタリア經濟學」とも稱す可きものが既に聲高く提唱せられつゝあつた時、利子を以つて資本家の制欲に對する報酬な

りと主張する新原理がナッソー・ウィリアム・シィニョアによつて主張せられたのである。

五

アダム・スミスは既に直接消費の「現在の享樂」に對して資本家の決意に酬ゆる「將來的利潤」を峻別し、(Wealth of Nations, vol. I, 1776, p. 339.) 而してリカードは前述の如く、利潤が減少して皆無と爲る久しき以前に於いて、蓄積の動機は存せざるに至る可きことを説いたのであるが、而も英國利子學說史上に於けるシィニョアの先驅者として特に、地質學者にして、又經濟時事問題に關する有名なる小冊子の著者たるデューヂ・ポーレット・スクロープ(G. Poulett Scrope)の名が擧げられてゐる。(Böhm-Bawerk, a. a. O., S. 243.)

スクロープは其の Principles of Political Economy, deduced from the Natural Laws of Social Welfare, and applied to the Present State of Britain, 1833. の第七章に於いて資本を論じ、「資本家の配分は、大方、其の使用に際して消費せられ、損傷せられ、若しくは使ひ切られた彼れの資本の部分を置き換ふるが爲めに費される。然しながら、是れ以上の或る餘剰が後者(資本家)に對して殘存しなければならぬ。蓋し、何人と雖も、其の資本を生産的に使用するによつて何物をも取得し得ないならば、彼れは斯くの如く其の資本を使用するの甲斐がないであらう。資本家の資本が置き換へられた後に於いて彼れに生じた餘剰が、資本の使用に對する彼れの唯一の報酬であつて、其の利潤と稱せられる。利潤は資本家をして彼れの資本を生産に使用せしむる資本家の誘因であつて、恰も貸銀が労働者をして其の熟練と力とを同一の方法に働かしむる誘因を形成するに等しきものである。前者は明かに、恰も

後者が彼れの労働の使用に對して支拂はるゝ権利を有すると等しく、彼れの資本の利用に對して支拂はる可き権利を有する。兩者は其の孰れのものも缺いても存することを得なかつた合成的成果を生ぜしむるが爲めに結合した。資本がなかつたならば、労働は殆んど不生産的であつたであらう、労働がなかつたならば、資本は、縱令ひ浪用の虞れがないとしても、活動することなく、又増加せしめらるゝことのない状態を續けて來なければならぬ」と論じ、(Ibid., p. 145.) 而して、資本所有者自身的手中に存すると、又其の貸付けらるゝ他の當事者的手中に存するを問はず、其の生産的使用から資本の所有者によつて取得せらるゝ利潤は、彼れが個人的満足に彼れの財産の該部分を消費するを暫時控へること(abstaining for a time from the consumption)に對し、彼れへの補償として觀察せらる可きであり、斯くて又、其の補償は収入と等しく、彼れの資本が彼れ自身の上に費さるゝことなくして斯くの如く使用せらるゝ時間に比例せしめらるゝと説いた。(Ibid., p. 146.)

是れに由つて觀るに、スクロープの意見は、資本家の犠牲の對象を以つて制欲と做すよりも、特に時間であると做すが如くである。マツカラック及びジェームズ・ミル等によつて、時間は單なる言葉であり、音響であつて、何物をも爲すことを得ず、何物でもなく、従つて又、價值を有することも、價值を與ふることも出來ぬものであると言はれた。(McCulloch, op. cit., p. 314; James Mill, op. cit., p. 9.) 然しながら、斯くの如きはスクロープを以つて觀れば、非常なる大誤謬である。(Scrope, pp. 146-7.) 而して彼れは、あらゆる物品を生産する費用中に在つて、該物品の充分なる供給を來し、而して之れを市場に齎すが爲めに要せらるゝ労働、資本及び時間より成る部分

を以つて遙かに最重要なるものと做した。(Ibid., p. 188.)。而して彼れは前掲ホッヂスキンの諸著を擧げて、第十九世紀の文明世界に於いて、資本が人間生活の必需品、快適品及び奢侈品の生産上演じつゝある偉大なる役割に關して、苟も吾人が其の眼を注ぐ所に於いて與へらるゝ總べての證左の唯中に於いて、猶ほ資本を以つて社會の害毒と做し、又、其の所有者による資本に對する利子の徴收を以つて、惡習、不正、勞働者階級の強奪と做して堂々と攻撃する盲目なる人々の存在を訝つた。(Ibid., p. 150.)。

六

利潤が果して生産費の一部を構成するや否やは當時經濟學界の問題であつた。リカードは利潤も亦、生産費の一部を形成することを承認した。(Principles, 3rd ed., 1821, p. 46; Notes on Malthus' "Principles of Political Economy", ed. by Jacob H. Hollander and T. E. Gregory, 1928, p. 18. 前掲拙著一八七頁参照)。
 ミルは用語を擴張して、勞働なる名辭の下に利潤を包括する。(Elements, 3rd ed., 1826, pp. 103, 104.)。マルサスも亦、必要なる生産費中に利潤を算入した。即ち彼れは是れを以つて「生産に必要な蓄積せられたる勞働及び直接勞働の定量の前拂ひと、普通の利潤に等しかる可き、是れ等の前拂ひの使用せられたる期間に對する其の前拂ひの全部に對する歩合とから成るものと觀た。(Definitions in Political Economy, preceded by an inquiry into the rules which ought to guide political economists in the definition and use of their terms; with remarks on the deviation from these rules in their writings, 1827, p. 242.)。然るにこれに反して、トールレンズは、資本の利潤

は生産費の如何なる部分をも形成することなく、却つて這般の費用が完全に補充せられた後に殘存する餘剰であると做した。(An Essay on the Production of Wealth; with an Appendix, in which the Principles of Political Economy are applied to the actual circumstances of this country, 1821, p. 54. 前掲拙著二〇八頁参照)。

シイニイオアは斯くの如き論争の後に現れて、這箇相異り相争ひつゝある意見は、之れを提唱しつゝある著者が生産に際して制欲によつて演ぜらるゝ役割を會得し得ざるに基くものであると説いた。總べての者は這般の力の存在を承認するも、而も單に其の資本の起源との關係に於いてのみ之れを思考するに過ぎない。制欲なる名辭、若しくは或る之れと同意義の表現法の無いことはマルサスを用語の不正確に導いた。彼れは單なる勞働以外の或るものが生産に取つて缺く可らざることを感知せるが如くである。シイニイオアに取つては、マルサスが利潤を生産費の一部と稱した時、彼れは利潤を意味することなく、利潤によつて拂ひ戻さるゝ所爲を意味せるが如き觀がある。斯くの如きは正に賃銀を以つて生産費の一部と稱する者によつて犯さるゝ不正確に類するものである。蓋し其の意味する所は、結果たる賃銀ではなく、賃銀が其の報酬たる勞働なるが故である。(Political Economy, 3rd ed., 1854, p. 100.)。トールレンズ大佐の過ちは爲す可くして爲さざりしの過ちである。彼れは利潤を生産費の一部と考ふことを拒むも、而も彼れは之れに代ふるに制欲若しくは一定の同義語を以つてすることがない。彼れは等しい資本が使用せらるゝ所に於いて、其の一が他のものよりも速かに市場に齎さるゝとしたならば、諸生産物の價值が相違す可きことを認めたと拘らず、彼れは斯くの如き相違の依存する原理を述ぶることがなかつた。其の原理は、兩者の

場合に於いて使用せらるゝ労働は同一であつても、一方の場合に於いては他の場合よりも多くの制欲が必要であると云ふことである。(Ibid., pp. 100-101.) 斯くてシイニオアに従へば、自然價值を構成する生産費は「生産に必要な労働と制欲の總額」であつて(Ibid., p. 101.)、制欲が利潤に對するは、恰も労働が賃銀に對すると同一の關係に立つものである。(Ibid., p. 59.) (前掲拙著二二三—二三〇頁参照)。

斯くて冷靜なる理論家的態度を以つて資本所得を辯明せんとするの舉あると共に、他方には、地主の對社會的關係を辯護せんとするの企てが行はれた。吾人は爰にマルサス及びリチャード・ジ・モーンズの地代に關する所説を窺はなければならぬ。

七

マルサスとリカードとは彼れ等の地代學說に於いて、其の要點の或るものに關しては一致するも、他のものに在つては著しく相違する。マルサスは其の *An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, and the Principles by which it is regulated*, 1815. に於いて頗る大なる範圍までリカードの地代說の至要なる諸點を豫示した。マルサスは此の短論篇に於いて先づ第一に、原産物高價の原因若しくは諸原因に就いて論じ、而して此の點に於いてアダム・スミス若しくは重農學派の人々 (*The Economists*) の執れによつて採られた見解にも悉く一致することが出來ず、又、セイ、シスモンデイ及びブカナンの如き更らに新たな論者によつて採られた見解に至つては更らに一致を見ること少きものと做してゐる。蓋し、是れ等の論者の殆んど總べては、彼れを以つて觀れば、餘りに近く、

其の本質に於いて、又、其の支配せらるゝ諸法則に於いて、獨占の特性たる生産費以上に出でたる價格の超過額と類似しつゝあるものとして地代を考察するの觀あるが故である。(Ibid., pp. 27.)

マルサスに従へば、自然的獨占 (*partial monopoly*) なる語を之れに適用して過りなきものであらう。然しながら、土地の吾人は恐らく部分的獨占 (*partial monopoly*) なる語を之れに適用して過りなきものであらう。然しながら、土地の稀少は決して其れのみでは原産物を高價ならしむるに充分ではない。原産物の高價は、其の本質及び起源に於いて、又、其の支配せらるゝ諸法則に於いて、共に、普通の獨占物の高價と本質的に相違する。而してマルサスは原産物高價の原因を以つて三個と觀る。第一に、而して主として、其の土地の上に使用せらるゝ人々の給養の爲めに要せらるゝよりも、生活必需品のより大なる部分を生ぜしめらるゝを得る大地の性質、第二に、其れ自身の需要を創造し得る、換言すれば、生産せられたる必需品の分量に比例して需要者の數を生ぜしむ可き生活必需品に特有なる性質、而して第三に、最も豐沃なる土地の比較的稀少が是れである。(Ibid., p. 8.) 第二原因は即ち彼れの一般人口學說と適合するものであつて、生活必需品は、あらゆる他の貨物とは反對に其れ自身の需要を生ずると言ふに在る。他の貨物に在つては、需要は生産其の者の外に存し、又、生産其の者から獨立する、斯くて夥多は低廉を來す、然るに之れに反し、食料は人口に對する需要なるが故に、生活必需品に對する需要は産物其の者に依頼する。斯くて逆説的に、茲には高價の原因が稀少よりは、寧ろ夥多に於いて看出さる可きである。(昭和四年版拙著『經濟學史』一五五頁参照)。

斯くの如き考察からして地代の説明は生ずる。豊沃なる土地が豊富に存在し、之れを求むる總べての者によつて領有せられ得る間は、何人と雖も、固より、地主に對して地代を支拂はんとすることがないであらう。(Ibid., p. 17)。後に至つて、更らに確かなるか、若しくは更らに惠まれざる地位の土地が耕作せらるゝに至ることがあるであらう。(Ibid., p. 21)。而もあらゆる進歩的國家に於ける産物の價格は、恰も、實際に使用せられつゝある最劣等地に投ぜられたる生産費、又は、殆んど若しくは全然、地代を伴はざる農業資本の普通の報酬のみを生ずる舊地上に附加的産物を生ぜしむるの費用に略々等しくなければならぬ。(Ibid., pp. 35-36)。一國の最も豊沃なる土地、即ち製造業に於ける最良の機械の如く、最少の勞働及び資本を以つて最大の産物を生ずるものは、決して増加しつゝある人口の有効需要を充すに十分なりと認めらるゝことがない。斯くて原産物の價格は、それが更らに劣つた機械を以つて、又、更らに經費大なる過程によつて之れを擧ぐるの費用を償ふに充分なる高さとなすまで自然に騰貴する、而して同一品質の穀物に對して二つの價格は存すること能はざるが故に、其の操作が産物と比較してより、少なき資本を要求する他の機械の總べては、其の佳良性に比例して地代を生じなければならぬ。(Ibid., p. 38)。吾人は是れ等の章句に據つて如何にマルサスがリカードの地代學說に接近すること大なりしやを知ることが出来る。洵にリカードの人は其の *An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of the Stock; shewing the Inexpediency of Restrictions on Importation: with Remarks on Mr. Malthus' two Last Publications*, 1815. の緒言に於いて、彼れが此の書中に於いて略述せる地代を支配する諸原理は、マルサスが其の優れた近業中に於いて巧みに表明せる所のものと極めて輕微なる程度に於いて相違するものであつて、彼れが之れに負ふ所、頗る多き旨を述べてゐる。(Ibid., 2nd ed., 1815, p. 1.)。

然しながら、マルサスは、彼れがブカナン (David Buchanan) の如く、地代を以つて、國富に對する何等の附加に非ずして、唯り地主に取つてのみ有利であり、而して之れに比例して消費者に有害なる價值の移轉に過ぎざるものと観ることなく、却つて之れを以つて神が人間に與へたる土壤に於ける最高貴なる性質——之れを耕作するに必要なる以上の人々を給養するを得る性質の明瞭なる徴證と做すの點に於いて、(An Inquiry into the Nature and Progress of Rent, op. cit., pp. 15-16)。到底、地代を以つて、總べての場合に於いて先きに土地の上に取得せられた利潤の一部であつて、斷じて新たなる収入の創造ではなく、常に既に創造せられたる収入であると説くリカードと一致するものではなかつた。(An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, op. cit., p. 15.)。

是れ等二大經濟學者の地代に關する論争は夙にリカードが前掲『資本の利潤に及ぼす穀物の低廉なる價格の影響』を出版する以前よりして彼れ等の私信中に於いて行はれて居つた。リカードは、彼れが前掲マルサスの短論篇『地代の本質及び増進』を精讀して、其の著者に送れる一千八百十五年二月六日附消印の書翰中に於いて、地代は如何なる場合に於いても富の創造ではなく、そは、常に既に創造せられたる富の一部であることを述べて居る。

(Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus 1810-1823, ed. by James Bonar, 1887, p. 59.)

リカードの地代説に對するマルサスの異議は殊に彼れの Principles of Political Economy considered with a view to their practical Application, 1820. 中に於て明瞭に表示せられてゐる。彼れは特にリカードの農業に於ける改良の結果に關する分析に反對する。

リカードに從へば、農事改良の結果は收益遞減法則の影響を中和す可きである。其の直接の結果は穀物地代若しくは貨幣地代の孰れか、若しくは兩者を減少するに存し、而して其の究竟の結果は、他の事情の下に於いては動もすれば生ずるの傾向ある可き急激なる地代の騰貴を抑制するに存する。若し地主の利害が吾人をして低廉なる價格に於いて穀物を輸入することから生ず可き總べての便益を利用せざらんと決心せしむるに足るの効果を有するとしたならば、そは又、吾人を動かして農業及び農具に於ける總べての改良を排斥せしむ可きである、蓋し穀物の輸入に由ると等しく、又斯くの如き改良に由つて、穀物は低廉ならしめられ、地代は低下せしめられ、而して地主の租税支拂能力も亦、少くとも一時損傷せらる可きこと確實なるが故である。(The Influence of a low Price of Corn, op. cit., pp. 49-50.)

マルサスは斯くの如き學説を拒否し、反對の其れを主張する。彼れの意見に據れば、農事改良の結果は常に地代を増加す可きである。彼れに從へば、地代は産物の價值と其の生産費との間の差違である。而して産物の價格と比較せられたる生産の經費を減少し、斯くて又地代を騰貴せしむるに資する原因の一に農事の改良が存する。其の改良にして何等産物の分量を増加することなくして著しく生産費を減少するが如き性質のものであるならば、穀物の

價格には何等の變化も起ることなかる可きは確實にして疑ひなきが故に、農民の過度の利潤は製造業及び商業よりの資本の競争によつて直ちに減少せしめらる可く、而して資本使用の全舞臺面は増加せしめられずして、寧ろ減少せしめられたであらうから、他所に於けると等しく土地の上に於ける利潤は直ちに其の以前の水準に復歸す可く、而して減少せる耕作の經費に基ける増加せる餘剰は地主の地代を増加するの結果と爲る可きである。而も、斯くの如き改良が、常に然らざるを得ざるが如く、新たな土地の耕作と同一の資本を以つてする舊き土地の更らに良好なる耕作を容易ならしむ可きであるならば、更らに多くの穀物が市場に齎さる可きことは疑ひなき所である。斯くの如きは其の價格を低下せしむ可きも、而も其の低落は短小なる期間のものであらう。適當に分配せられたる際には其れ自體の需要を創造する生活必需品の力、即ち換言すれば、生存の手段を壓する人口の傾向は直ちに穀物及び労働の價格を引上げ、而して資本の利潤を其の以前の水準に低下せしむ可く、又其の間に一方に於いては、斯くの如き改良によつて容易ならしめられたるより、確たる土地の耕作と既に耕作せられたるより、良好なる品質の總べての土地に對する其の適用に於けるあらゆる歩程は普く地代を引上げ可きである。斯くて又、改良せられつゝある耕作法の下に於いては、穀物の交換價值に於ける何等の騰貴、若しくは労働の實物賃銀又は利潤の一般率に於ける何等の下落なくして地代は騰貴を持続することある可きである。英國に起つた農業上の著大なる改良は殆んど全く地代の増加と租税の支拂に歸着したのである。(Ibid., pp. 163-165.)

斯くてマルサスは、地主の利害が社會の他の成員の其れと本質的一致に於いて存することを主張して、前者の利

害が後者の其れと對立すると做すリカードの結論を非難した。アダム・スミスは、地主の利害が國家の其れと密接なる關係を有し、前者の榮枯盛衰が必然後者の其れを伴ふことを述べた。(Wealth of Nations, 6th ed., Bk I, c. xi, p. 394.)。然るにリカードは曰く、地主の利害は常に消費者及び製造業者の其れと反對すると。(Princ. of Polit. Econ., 2nd ed., c. xxiv, p. 423.)。即ち彼れに従へば、地主階級は國內に於けるあらゆる他の階級と對立する。彼れは、彼れをして穀物の生産に随伴しつゝある費用が増加せられざるを得ざることが地主の利益たること、並びに農業上の改良が地代を引上ぐるよりも寧ろ引下ぐるの傾向あることを説かしむる彼れが地代に關して探つた特殊の見解によつて矛盾なく斯くの如き意見に導かれたのである。地代の理論に關する這般の見解が正しいとしたならば、上述の意見が根據あるものであることは疑問の餘地なき所である。然しながら、之れに反して、地主の所得が實際に土地の自然的沃度、農業上に於ける諸改良及び労働を節約す可き諸發明に依頼することが看出されたとするならば、吾人は尙ほアダム・スミスと共に、地主の利害が國家の其れと對抗するものではないと考へ得可きである。(Malthus, Principles, op. cit., pp. 204-205.)。

マルサスに據れば、吾人が是れまでに見聞せる如何なる農業上に於ける改良と雖も、決して附加的生存資料に迫るまで増加せんとする人口の力に匹敵することがない。實際上に於いては、農業上に於ける改良は土地を斥けて耕作せられざるに至らしむることなく、耕作の用具の低廉なるに由つて概して更らに多くの土地をして耕作せらるゝに至らしめる。齊だに農業上の改良は斷じて地代を低下せしむることがなかつたばかりでなく、それは是れまで、吾

人の熟知せる殆んど總べての國家に在つて地代増加の主要源泉であり、又、將來に於いても然る可く期待せらるゝを得可きものである。(Ibid., pp. 206-207.)。新たなる地上に於いて穀物の一定量を生産するが爲めに労働及び資本のより大なる分量を必要とするの事實によつて専ら惹起せらるゝ價格の増加から生ずる地代の増加は、想像せられたよりも限定せらるゝことの遙かに大なるものであつて、實際上に於いては、農業上に於ける改良並びに土地の上に於ける労働の節約の兩者は地代増加の遙かに有力なる源泉であることが看出さる可きである。(Ibid., p. 208.)。而して略々自己の穀物消費量若しくは斯くの如き消費量の同一比率を永く生ずる一國に於いては、凡そ一國を富裕ならしむるに資する總べての物は悉く地代を増加するの傾向を有し、又、之れを貧困ならしむるに資する總べての物は之れを低下するの傾向があるとしたならば、地主の利害と國家の其れとが想定せられたる事情の下に於いては、絶對に不可離であることが認められなければならぬ。(Ibid., p. 211.)。

マルサスに據れば、地主の利害と國家の其れとの間の最緊密なる結合に關して起り得る唯一の想像し得可き疑問は輸入の問題である。アダム・スミスは最も自由なる穀物及び原産物の輸入が農業家及び地主を害すると能はずと做すの意見を有して居つた。(Wealth of Nations, 6th ed., Bk IV, ch. ii, p. 189.)。彼れの意見は疑ひもなく餘りに強硬に過ぐるものである。然も尙ほ、地主の個人的利益が他の社會階級の或る者の利益に比し輸入によつて損害を蒙ること少なき事は之れを承認しなければならぬ。輸入の問題に關しては、資本が實際上土地の上に使用せらるゝ方法に於いては、耕作者たる個人の利益と國家の其れとが相互に對して比例せしめられないと云ふことを一言す

ることが必要である。國土の耕作は主として借地人によつて遂行せられる。而して最近三十年間に於ける農業並びに耕作の用具及び方法に於ける偉大なる永續的改良の大部分は、斯くの如き階級の人民の資本によつて行はれたのである。果して土壤の上に行はれた改良の頗る大なる部分が借地人の資本、熟練及び勤勉から取得せられたことが眞であるならば、國家が這般の資本の使用から取得する利益は、之れを使用しつゝある個人によつて取得せらるゝ利益よりも遙かに大でなければならぬ。商業に使用せられた資本の場合に於いては、國家に對する利潤は個人によつて取得せらるゝ利潤に比例せしめられる。農業に使用せられた資本の場合に於いては、それは遙かに大でなければならぬ。而して斯くの如きは其の収益が貨幣を以つて見積られても、又穀物及び労働を以つて見積られても眞であらう。凡そ現實に起つた事情の下に在つて、孰れの方法に於いても、農業に使用せられた資本から取得せらるゝ國家に對する利潤は恐らく一割四分若しくは一割五分と見積られ得るのであるが、兩者の場合に於いて、個人に對する利潤は單に一割二分に過ぎなかつたであらう。地代と利潤とを一緒にしたものも斯くの如く使用せられた資本から國家によつて取得せらるゝ富の眞の尺度である——國家に對する這般の富の増加は、斯く其の資本を使用しつゝある個人に對する誘因として作用することを得なかつたのである。(Malthus, Principles, op. cit., pp. 217-222)。

那翁戰役を通じて、外國穀物の輸入に課せられた自然的拘束は、強ひて國內耕作の利潤を引き上げるによつて、一國の資本をしてより有利なる水路に向はしめ、而して初め或る者が確然期待せざるを得ざりしが如く、富と人口の發達を阻害することなくして、却つて之れを助成したとは疑ひなき所であらう。斯くの如きは、國內に於いて生ぜしめらるゝ穀物に對する需要が、耕作せらるゝに至つた新たなる土地の上に使用せられた資本の利潤と其の發生せしめた地代とを結合したものが相合して、商業に使用せらるゝ資本の収益よりも使用せらるゝ資本に比例してより大なる収益を形成するが如き場合には常に然らざるを得ざる所である。蓋し、此の場合に於いて、外國の穀物は斯くの如き拘束がなかつたならば、それが自國に於いて生産せられ得る所のものよりもより低廉なる貨幣價格を以つて購入せらるゝを得可きであるとしても、それは資本の有利なる使用の眞の證左たる斯くの如き少量の資本及び労働の投費を以つて購入せらるゝことなかる可きが故である。然しながら、富の進歩が、資本及び労働の同一量によつて外國から購入せらるゝを得たよりも、國內に於ける資本及び労働の一定量によつて購入せられた更らに大なる原産物の定量に由つて、富の進歩が外國穀物の輸入に對する這般の拘束によつて阻害せらるゝよりも寧ろ促進せられたならば、人口の増加が阻害せらるゝよりも寧ろ促進せられなければならなかつたことは極めて明かである。而して慥かに最近十年乃至十五年間に於ける異常に急速なる人口の増加は強く、土地に赴いた資本の大なる定量が生産的に使用せられたと云ふ結論を確證するに資するものがある。爰に下された論斷は限定せられたものであつて、單に斯くの如き改良の成果に於いて一時的利益を有するに過ぎざる資本家によつて行はるゝ永續的改良に依存する。(ibid., pp. 222-224)。

マルサスの意見に従へば、斯くの如き考察は、曩きに論及せられたるものと結合して、外國穀物の輸入に對する拘束の場合に於いてすら、國家の利害が往々にして地主の其れと同一に非ざることを得るや否やを、少くとも疑は

しい問題たらしむるを得可きである。然しながら、他の貨物の輸入に對する制限に關しては、何等斯くの如き疑問は存することがない。而して吾人が、完全に自由なる通商の國に於いては、資本及び人口の増加す可きことは特に土地の地代に生活する者の利益であるが、資本の利潤及び労働の賃銀に衣食する者に取つては、資本及び労働の増加は、十分控へ目に言つても、遙かに多く疑はしい利益であることを附言する時は、其の國內に於ける如何なる他の階級の利益も地主の利益の如く、爾く緊密且つ必然的に其の富強と關聯せるものはないと主張して誤りが無いのである。(Ibid., p. 225.)

後に述ぶ可きリチャード・ジョーンズの地代説に關する『エジンボロ評論』の一項に於いて、評者は地主の地代に及ぼす農事改良の結果に關するリカードの誤謬に言及して曰く、「若しジョーンズ氏が這箇リカード氏の謬見を指摘し、而して之れを訂正せる最初の人であつたならば、彼れは斯學に對して或るさゝやかなる貢獻を爲した譯である」と。而も、評者に據れば、這般の誤謬に對する最初の訂正はジョーンズの著作の現るより十二個月以前に出版せられたマッカラクの『The Principles of Political Economy』の第二版に於いて行はれてゐる。而して評者はジョーンズが他人によつて爲されたる所のものを知らざるの故を以つて之れを非難せんとする者であるが、而も何んぞ知らん、斯くの如き誤謬は嘗だに十二個月のみならず、殆んど十二年以前に於いて、早く既にリカードの『原論』第三版が世に現るゝに先立ち、一千八百二十年に於いて、マルサスによつて行はれたことを同書第一版は註記しつゝある。(Ibid., Second Edition with considerable Additions from the Author's own Manuscript and

An original Memoir, 1836, p. 196.)

八

洵にマルサスの後に出でたるリカードの地代學説に對する重要なる批評家はマルサスの死後、其の後を繼承して一千八百三十五年三月、ヘイリイベリー東印度學校經濟學及び史學教授に任命せられたリチャード・ジョーンズ(Richard Jones)であつた。彼れは、其の雜記帳に記したる覺書の一に於いて、マルサス及びリカードの地代説に對して短評を下してゐる。曰く、「リカードの明々白々たる第一の誤謬は、彼れが地代を以つて、國民的富に對して何等の附加を形成することなく、唯り地主にのみ有利であり、而して之れに相當して消費者に有害なる價値の讓渡であると説き、若しくは斯くの如く説く他の人々に賛成することである。扱て、彼れ自身の理論に従へば、穀物の價格は常に自然價格若しくは必要價格である。而して這般の價格が社會に有害であるならば、そは一定社會の特殊事情(其の地所の不毛、其の人口の稠密等)に適用せられて斯くの如き價格をして自然且つ必要ならしむる自然の一般法則によつて有害である。若し其の如何なる部分も地代と爲ることなく、そは悉く現實の耕作者に赴いたとしても、這般の高價格は等しく存在し、而して同じく消費者に取つて有害であつたであらう。リカードの採る主張は、穀物の價格は必要である、即ち消費者は是れよりも少なき價格を以つて之れを取得することを得ない、而も耕作者のジョン・ドーが之れを悉く保持する間は、社會は正當に之れに就いて不平を鳴すことを得ない、然しながら、リチャード・ローが其の一部分を彼れの地主トーマス・ノックスに拂ひ渡す時には、そは直ちに消費者に取つ

リカード直後に於ける其の分配理論に對する英國經濟學者の修正意見

て有害と爲ると云ふに等しきものである。而して斯くの如き誤謬、恐らくは又、寧ろ言ひ誤りと稱す可きものは、不良なる人々、若しくは少くとも懦弱なる人々が之れに訴へて、民衆を動かし、土地財産及び地主を排斥するに努めた一定の俗悪なる誤謬及び見解と一致するが故に、更らに一層慨歎す可きである」と。(Literary Remains, consisting of Lectures and Tracts on Political Economy, of the late Rev. Richard Jones, ed., with a prefatory notice, by the Rev. William Whewell, D. D., 1859, pp. 589-590.)

次に、ジョーンズに従へば、マルサスとリカードとは下記の提言に關して相違する——マルサスは言ふ「地代の第一にして且つ主要なる原因は、之れによつてそが土地の上に使用せらるゝ人々の支持の爲めに要求せらるゝ所よりも大なる生活必需品の部分を生ぜしめられ得る大地の品質である」と。之れを論議するに際し、リカードは言ふ、マルサスは爰に、あらゆる事情の下に於いて、地代は土地の沃度の増加と共に上昇し、而して其の減少せしめられた沃度と共に下降するであらうと云ふ一般原理として之れを述べたと。然るにマルサスは毫も斯くの如きことを言つたことがなかつた、而してリカードは斷じて唱道せられなかつた所のものを論駁するが爲めに其のイニキを濫費した後、マルサスが前掲の提言から引いた主要なる推論、即ち勞働しつゝある耕作者等の賃銀を支拂ふよりも多くを與ふるに足る肥沃の程度は地代の存在に必要な條件であること、並びに多少に拘らず、斯くの如き沃度は又、地代の限度であることを全然看過せるが如くである。是れ等の提言は殆んど自明であつて、そは唯り生産費を超過しつゝある収益の「價格」を説くによつて混亂せしめられたに過ぎぬと。(Ibid., p. 590.)

九

ジョーンズは東印度學校の教職に就く以前、即ち一千八百三十一年、其の *An Essay on the Distribution of Wealth, and on the Sources of Taxation*. の第一部として「地代」(Rent)を上梓した。而して彼れは先づ第一に、最良の土地が最初に耕作せられ、而してより、低き肥沃の程度に土地に依頼し、若しくは減少せられたる収益に於いて最良の土地の耕作に附加的資本を適用するを必要とする時、地代は初めて現るゝと做す地代の起源に關するリカードの學説を批評した。彼れに據れば、世界の過去の歴史と現在の狀態は斯くの如き事態が實際的眞實でなく、又、曾つて實際的眞實であつたこともなかつた事、及び政治哲學の諸體系の基礎として之れを假定するは單なる迷想到に過ぎざる事を明かにする夥しき證據を與へる。(Ibid., p. 55.) 人間社會の現實の進歩に於いては、人民の多數が彼れ等の取得し得るが如き條件に於いて土壤を耕作するに非ざれば餓死せざるを得ざるに到つた時、又、彼れ等の道具、種子等の乏しき資本が、農業以外のあらゆる他の職業に在つては全然彼れ等の生計の資を確保するに不充分なるが爲めに強壓的必要に驅られて土地に其の身を束縛せられた時に、地代は土壤の領有に於いて發生するを常とする。然れば、彼れ等を驅つて地代を支拂ふに至らしめた必要は、彼れ等の占有する土地の品質に於けるあらゆる相違から全然獨立したものであり、又、土壤が總べて平等ならしめられたとしても除去せられざるものであらう。(Ibid., p. 11; cf., pp. 3-4.)

彼れの研究は又彼れをして、地代が決して單一なる原理に依つて説明せらるゝこと能はざるものであり、種々な

る原理が種々なる時代に於いて、又種々なる事情の下に於いて作用し來つたと云ふ結論に到達せしめた。土壤の耕作者が彼れ等自身の手と僅少なる資本とを以つて勞作し、而して君主たるか、若しくは大地主たる所有者に對して直接地代を支拂ふ百姓より成る場合には、彼れ等の支拂ふ地代の形態及び高は彼れ等自身と所有者との間の直接契約によつて決定せられる。斯くの如き契約の條項は往々にして是れ等のものゝ締結せらるゝ國々の法律により、又殆んど常に長く確立せる慣習によつて影響を受ける。總べてのものに於ける主要目的は、所有者側に於ける最も少なく行はれ得可き煩勞若しくは危険の高を以つて所有者に収入を確保するに存する。斯くの如きものが「百姓地代」(Peasant Rents)である。一定の重要な原理によつて共同に支配せらるゝものではあるが、此の種の地代の更らに微細なる部分に於ける相違は固より殆んど無限である。ジョーンズは此の百姓地代を第一「勞働地代」(Labor Rents)又は「隸農地代」(Seri Rents)、第二「分益農地代」(Metayer Rents)、第三「ライアット地代」(Ryot Rents)及び第四「小百姓地代」(Cottier Rents)に大別する。(Ibid., pp. 15-16)。

未開國の土地所有者は勞働を指揮するの勞務を好まず、又之れに適せざるの常であつて、彼れ等にして若し收穫地代の受領によつて、彼れ等の用途に適せる必要品の供給を當にすることが出來るとしたならば、彼れ等は一樣に百姓の上に耕作の全事業を課する。然しながら、彼れ等が安全に之れを行ひ得ることは、借地人其の人に一定の熟練と自發的及び正規的勞働の習慣の存するを推定する、彼れ等は又或る範圍まで信用し得可きものでなければならぬ。而も文明進歩の或る階段以下に在つては、人民の大衆は斯くの如き條件を有することがない。所有者等は縱

令ひ如何に勞役を嫌惡するとしても、彼れ等は斯くの如き社會階段に在つては耕作を管理するの煩勞を或る程度まで分擔せなければならぬ。然しながら、彼れ等は這般の耕作の道具たる勞働者の爲めに食料を擧ぐるの勞役を免れんことを工夫するであらう。彼れ等は其の所有地の一部分を彼れ等の使用の爲めに取除き、而して彼れ等をして彼れ等自身の危険に於いて之れよりして彼れ等自身の生計を抽取するに委するの常である。彼れ等は所有者の手中に保留せらるゝ其の所有地の殘餘部分の上に使用せらるゝが爲めに、勞働の一定量を斯く拋棄せられたる土地に對する地代として取立てる。斯くの如きは勞働者等が這箇半文明の状態に於いて存し、又、何等の資本家も未だ存在せざる間に於いて、一般に土壤の所有者の胸に自から浮びたるの觀ある方策である。(Ibid., pp. 17-18)。

勞働若しくは隸農地代は漸次西歐諸國から消滅せるが故に、ジョーンズは其の完全なる状態に於いて之れを觀察するが爲めに直ちに東歐に就いて觀察し、先づ露西亞より始めて、匈牙利、波蘭、リヴォニア、エストニア、普魯西及び獨逸を通じて其の形態及び精神に於ける衰頹の跡を辿り、而して其の境界に於いては別箇の諸制度中に鑿解し、最早明かに認めらるゝことを得ないライン地方に及ばんとする。(Ibid., chap. ii)。

分益農は土壤よりして彼れ自身の賃銀と生計とを抽取しつゝある借地農である。彼れは彼れが其の食料を取得する土地の所有者に收穫地代を支拂ふ。地主は彼れに其の生活する土地を供給しつゝあるの外、彼れの勞働が援助せらるゝ資本をも亦、彼れに供給する。爰に於いて乎、地主に對する支拂は二つの別箇の部分より成るものと考へらるゝとが出來る。一は彼れの資本の利潤を構成し、他は其の地代を構成する。貸與せられた資本は瑣小なるを常と

する。土壤の生産力により、大地の機關によつて援助せられなかつたならば、斯くの如き資本は全然如何なる勞働者等をも永續的に扶持するに足らないか、若しくは或る他の形態に變ぜしめられたならば極めて少數者の一時的支持に備へらる可きである。而も大地の特有なる諸力を援助するが爲めに適用せらるゝ時は、此の瑣小なる資本は勞働者の多數集團をして永續的に彼れ等自身を支持するを得せしむるに足ると認められる、而して地主は彼れ等の勤勉の所産の配分を受ける。斯くて土地の占有が彼れをして取得するを得せしめたものであつて、又、土地なければ、彼れが取得することを得なかつた收穫は土地保有者としての彼れの配分に歸する其の國の勞働の年收益の部分である。是れが地代であつて、自餘のものが利潤である。(Ibid., pp. 73-74.)

分益農は隸農に比し其の熟練及び品性に於いて稍や立ち優つて居らなければならぬのであるが、而も猶ほ所有者による資本の貸與と現實の勞働者等に對する耕作の管理の委付とは依然として中間資本家階級の存在せざることを示してゐる。そは世界の種々なる部分に於いて發生しつゝあることが看出さるゝのであるが、而も純粹なる分益借地農が最も普遍なるは歐洲大陸の西部、伊太利亞、サヴォイ、ピードメント、ヴァルテルリン、佛蘭西及び西班牙であつて、而して彼れ等が耕作の諸制度及び土壤の領有に起源を有する相異なる社會階級間に於ける重要な關係に最も確乎たる影響を及ぼすは是れ等の地方である。分益借地農は曾つて羅馬帝國の屬州であつた是れ等の諸國に羅馬人によつて誘入せられた、而してジョーインズは歐洲に於ける其の起源を發見するが爲めに、古代希臘及び羅馬に於ける分益農に遡り、次いで佛蘭西及び伊太利亞に於ける其れに就いて述べる。(Ibid., chap. III.)

ライアット地代は、少數の例外を除いては、亞細亞に特有なるものである。是れ等のものは亞細亞人によつて歐羅巴土耳其に誘入せられた。是れ等のものは埃及に存し、又恐らくは向後亞弗利加に於いて其の存在を認め得るであらう。是れ等のものは土壤よりして彼れ自身の賃銀を擧げつゝある勞働者によつて其の所有者としての君主に支拂はるゝ收穫地代である。是れ等のものは、借地人が彼れより要求せらるゝ地代を支拂ふ間は依然其の土地の配分の占有者として残る可き、借地人の側に於ける不確かなる權利によつて隨伴せらるゝのが常である。斯くの如き地代は其の領地の土壤の唯一の所有者としての君主の諸權利に源を發するものである。斯くの如き諸權利は一定時期に於いて大多數の國民によつて承認せられた所である。歐羅巴に於いては是れ等のものは消滅し去つたか、若しくは名のみのもので爲つたのであるが、亞細亞の諸君主は依然として借地農民の直接地主たるものである。(Ibid., p. 109.) 既に蓄積せられた貯藏から人民の多數の衣食を生産することの出来る資本も資本家も孰れも存在することがない。百姓は耕耘す可き土地を有するに非ざれば、餓死しなければならなかつた。斯くて國民の大衆はあらゆる場合に於いて食料を取得するの手段に對して偉大なる君主的所有者に依頼する。殘餘の人民の中、最重要なる部分は、軍人又は文官の資格に於いて、彼れ等の首長の恩恵に依つて彼れ等に割當てらるゝ百姓から徵收せらるゝ収入の一部分によつて生活する。中間獨立の階級は存することがない。同様の制度は亞細亞の總べての大帝國に於いて行はれてゐるが、そは各々氣候、土壤及び政治の相違から生ずる特異性を有する。(Ibid., p. 113.) ジョーインズは印度、波斯、土耳其及び支那に於ける其れに就いて略述する。(Ibid., chap. IV.)

ジョーンズは、小百姓地代の項目の下に、土壤からして彼れ等自身の生計を抽取しつゝある借地農民によつて貨幣を以つて支拂はるゝことを契約せられた總べての地代を包括する。是れ等のものは種々なる國々に於いて或る範圍まで看出さるゝ所であるが、それが明かに其の國の一般状態に影響を及ぼすほど纏つて存在するのは唯り愛蘭に於いてである。是れ等のものは下の如き點に於いて他種の百姓地代と最も重要な相違がある。隸農地代の場合に於けるが如く、其の勞働の一部を、若しくは分益農又はライアット地代の場合に於けるが如く、收穫の一定の割合を借地人をして自己を支持するを得せしむる土地に對する報酬として與へんと心掛くるのでは借地人に取つて充分でないこと云ふことが是れである。彼れは縱令ひ、其の收穫の分量又は價值が如何にあらうとも、所有者に對して一定額の貨幣を支拂ふの義務がある。斯くの如きは誘入することが最も困難であり、而して誘入せられた際には頗る重要な變化である。(Ibid., p. 143.)。愛蘭の場合に於いて、百姓によつて支拂はるゝ貨幣地代の制度を支持するものは、英蘭に近きことと兩國間の關係とである。愛蘭にして若し同國に比して多く發達することのない國々に圍繞せられて、世界の更らに遠隔なる地方に置かれたとしたならば、又、同國の耕作者等にして若し彼れ等が現金を得るの手段を自國內部の交換の機會に依頼したとしたならば、地主が必要に驅られて、直ちに他種の借地農民によつて耕作せらるゝ、地球の廣大なる部分に於いて行はるゝ所の其れに等しき勞働又は收穫地代の孰れかの制度を採用するに至らしめらる可きことは恐らく疑ひなき所であらう。(Ibid., p. 144.)。

十

ジョーンズは其の筆を進めて「農業家地代」(Farmer's Rents)を論ずる。文明と富とに於ける一定の進歩の後、勞働階級の賃銀は最早彼れ等自ら大地よりして抽取せる收入から成立せざるに至る、食料は資本家をして勞働者の種々なる勞務の進行中、彼れの生計を彼れに前貸するに充分なる分量に於いて資本家(即ち其の蓄積せられたる資本よりして利潤を生ぜしむるが爲めに之れを使用しつゝある人々)の手中に蓄積せられる。彼れ等は、完成せられた時、這般の勞務の所産を收受する、而して其の際に、地主及び勞働者の兩者から判然區別せられた階級の人々の上に國民的産業の管理を與ふるに至要なる大着歩が行はれたのである。斯くの如き變化は非農業階級に始まるを常とする、初めて自己を資本家の管理の下に落ち着けたものは工匠及び手工業者であつた。(Ibid., p. 187.)。斯くの如き變化より生ずる直接の結果の一は、農業に使用せられたる勞働及び資本を隨意に他の職業に移し得ることである。借地人が彼れ自身勞働しつゝある百姓であつた間は、其の生計に對する他の基本存せざるが爲めに、土壤からして彼れ自身之れを抽取することを餘儀なくせられて、彼れは已むなく其の土壤に束縛せられた、而して彼れの所有することある可き瑣小の資本は、唯だ耕作の目的の爲めに使用せらるゝに非ざれば、彼れに生計を得せしむるに充分ならざるが故に、それは事實上其の主人と共に土壤に束縛せられた。然しながら、勞働者の傭主が其の手中に彼れ等の生活を支持する物に等しき蓄積せられた基本を保有する時は、土壤に對する這般の依頼は破られる、而して勞作階級を土地の上に使用するによつて、斯くの如き社會状態に於いては豊富なる種々なる他の仕事に於ける彼れ等の努力よりするに等しきものを取得せられ得るに非ざれば、耕作の業は廢棄せらる可きである。地代は斯

くの如き場合には、必然單に「餘剩利潤」(surplus profits)、即ち土地の上に資本及び労働の一定量を使用するによつて、あらゆる他の職業に於いて是れに由つて取得せらるゝを得可きもの以上に取得せられ得る總べてから成るのである。(ibid., p. 188. 爰に more could be gained. 云々と記されてゐるのは more than could be gained. の誤謬なること一千八百四十四年版に據つて明かである。其の p. 177. 参照)。斯くして構成せられたる地代は直ちに賃銀の高を決定せざるに至る。彼れ自身の食料を大地より抽取することを餘儀なくせられた間は、労働者の保持する收穫の定量、換言すれば、彼れの實物賃銀の高は主として所有者と締結せらるゝ契約に依頼した。労働者の雇傭が資本家と契約せらるゝ場合には、這箇地主に對する依頼は解けて、彼れの賃銀の高は他の原因によつて決定せられる。賃銀の上及び地主の影響の終止は兩者の進歩上特に注意す可き時期である。主として英蘭の農業労働者を自餘の世界の其れより區別するは這般の事情である。(ibid., ed. 1831, pp. 188-189.)

地代が餘剩利潤より成る際には、特殊地點の地代が増加す可き三個の原因が存する。第一は、其の耕作に於ける資本のより、大なる定量の蓄積に基く收穫の増加、第二は、既に使用せられたる資本のより、有效なる適用、第三は、(資本及び收穫が依然として變化なき場合に於ける)這般の收穫に於ける生産階級の配分の減少、並びに之れに相應する地主の配分の増加である。是れ等の諸原因は資本家によつて耕作せらるゝ一國の地代を増大せしむるに於いて種々なる割合に於いて結合することがあるであらうが、而も各個の作用の特殊の力と態様とが一度理解せらるゝ時は、其の結合作用は容易に算定せらる可きである。(ibid., pp. 189-190.) ジョーンスは是れ等諸原因中の第一のものゝ作用する態様を次ぎの如くに説明する。

Aは單に一割の普通資本利潤を酬ゆるのみであつて、何等の地代をも支拂ふことのない土地の部類を表示し、B、C及びDは矢張り一十磅の資本を以つて耕作せらるゝ更らに良好なる土地の部分を表示し、而して是れ等のものゝ收穫は次ぎの如きものと假定する。

A	B	C	D
一一〇磅、	一一五磅、	一二〇磅、	一三〇磅

各個に於ける一十磅以上の總べては「餘剩利潤」、即ち地代たる可きものであつて、Bは斯くの如き地代を五磅、Cは十磅、而してDは二十磅支拂ふ可きである。次ぎに、收益の減少なく、又、各箇の收穫間に於ける割合を攪亂し、若しくは其の相對的沃度を變ずることなくして、各箇の上に使用せらるゝ資本が倍加せられたと假定するならば、是れ等のものゝ收穫は次ぎの如くであらう。

A	B	C	D
一二〇磅、	二二〇磅、	二四〇磅、	二六〇磅、

各個に於ける二百二十磅以上の總べては「餘剩利潤」、即ち地代たる可く、Bは之れを十磅、Cは二十磅、而してDは四十磅支拂ふ可きである。即ち、各個の地代は二倍と爲る可きである。(ibid., p. 204.)

ジョーンスは、收穫が使用せらるゝ資本の高と比例して増加することを推定し、收益遞減法則を無視する。彼れ

は此の學説が事實により、又、理論によつて否定せられたるものと觀る。農業的生産が之れを越えては損失なくして強行せらるゝこと能はざる無制限なる點の存することは疑ひのない所であるが、而も吾人は是れに由つて、増加しつゝ知識と手段とを有する人が、あらゆる階段に於いて生産力の喪失を蒙ることなくして、彼れの最も幼稚なる試圖からして此の無制限なる點に向つて進むこと能はざるものであると論結してはならない。人の身長は限られたるものである、人間が之れを越えては強さと氣力とを減少することなくして、身の丈を増加す可きことを期待するは徒爾なる可き點が存する、是れよりして、若人が其の成熟を遂げつゝある際に、彼れの身長に對して加へらるゝあらゆる時は、衰弱の増加によつて隨伴せられなければならぬと主張するは甚だしく不當である。(Ibid., p. 202.)。ジョーンズは却つて這般の點が到達せらるゝ以前に於いて、耕作術に於ける改良の歩を進むるに際して、土地に集中せられた資本及び勞働のあらゆる相續ける部分が其の前のものよりも經濟的に、又有効に適用せられ得ることある可きを主張した。(Ibid., pp. 199, 200.)。

農業家地代増加の第二原因は即ち使用せられたる資本の能率増加である。耕作に使用せられたる資本の能率増加は(一)一地點よりして一定量の收穫を生ぜしむるが爲めに、より、少なき資本が必要とせらるゝか、(二)同一の資本が其の先きに産出せるよりもより、大なる收穫を同一地點より生ぜしめ得るかとの二結果に現るゝのであるが、而も其の孰れに於けるとを問はず、地代は昂騰す可く、而して改良の發達が人口の發達を凌駕し、又、收穫の増進が需要の増進を超越するに非ざれば、(斯くの如き出來事は期待せらるゝこと稀れである)、使用せられたる資本の能率増加に基ける這般の地代騰貴は、永續的なる可く、而してそは其の國の農業上の富、人口、實力及び資源の擴張と時と同じうするを常とす可きである。(Ibid., pp. 236, 237.)。

農業家地代増加の第三原因は、收穫が依然として變化なき際に於ける生産階級の配分の減少である。原産物の相對的價値の騰貴は(他の貨物を生産する費用は依然として増減なき際に於いて)、其の騰貴が如何なる原因より生ずるとを問はず、常に其の使用する勞働及び資本と比較して、土壤の産物に於ける生産階級の配分の減少及び之れに相應する地主の收穫地代の昂騰によつて隨伴せらる可きである。何等の地代をも支拂ふことなく、單に普通の資本利潤を生じつゝあるに過ぎざる土壤たるAの上に一百磅が投資せられ、而して其の收穫が一クォーターに就き二磅四志に販賣せられつゝある穀物五十クォーター、即ち一百十磅であると假定する。若し穀物の相對的價値が騰貴して、價格が一クォーターに就き二志引上げられたとするならば、Aの上に投資せられた一百磅は一百十五磅を生産す可く、其の中五磅は餘剩利潤たる可きである。其の農業家の利潤は彼れと其の地主との間に締結せらるゝ次ぎの契約に於いて、其の隣人の利潤の水準に引下げらる可きである。斯くの如きは、彼れが其の土地の收穫の中、騰貴せる價格に於いて恰も彼れに一百十磅を支拂ふ可きだけを保留するによつてのみ唯り爲され得るのである。地主は殘餘の部分若しくは其の價格を收受す可く、而してそは地代と爲る可きである。以前には何等の地代をも支拂ふことのなかつたAは今や五磅の地代を支拂ふ可く、而して同様に是れまで地代を支拂つて居つた總べての優等なる土壤の上に騰貴が存す可きである。(Ibid., pp. 244, 245.)。ジョーンズを以つて觀れば、常に斯くの如き原産物の騰貴は先づ第

一に之れに相應する供給の増加なき需要の増加から生ずるものであつて、一國が既に耕作せられたるもの外、何等依頼す可き土壤を有することがないとしたならば、需要は絶えず、除々に増加しつゝある供給に先んず可く、而して原産物の相對的價值に於ける可能なる増加と其の結果たる地代の騰貴とは無制限なる可きである。然しながら、劣等なる土壤が存在し、而して之れに依頼することを得る時は、原産物の交換價值に於ける騰貴は限定せられる。そは穀物の價格が、普通の利潤率を以つて、恰も需要及び供給間の均衡を回復するに必要な收穫を生ず可きだけの是れ等劣等なる土壤を耕作するの經費を償ふに足る時は停止す可きである。斯くの如き事態は通常種々なる良好の程度の土壤を有しつゝある廣大なる國々に於いて存する所のものである。然しながら、吾人は是れに由つて吾人が今探求しつゝある原因より生起する地代の騰貴は、耕作が劣等なる土壤へ擴張するに先立てるものであり、又、之れより獨立せるものであつて、何等劣等なる土壤の存在するものがなかつたとしたならば、吾人が今現に之れを見るよりも、遙かに大なる範圍まで生起しなければならぬと云ふ事實を見失つてはならぬ。(Ibid., pp. 245-246.)

此の第三の原因に基く地代の騰貴は一國の資源に對する何等の附加をも形成するものではない。古き土壤の増加せる地代は既に存在しつゝある富の一部を生産階級より地主に移すに過ぎざるものであつて、其の國民は集合的に従前に比して富むこともなく、又貧なることもなく、唯だ單に其の既に有せる富の分配に於いて、變化が、而して決して望ましきものに非ざる變化が生じたに過ぎない。(Ibid., p. 247.)

而もジョーンズは、そが必ずしも一般に資本及び勞働に對する報酬に於ける減少によつて伴はねばならぬものではないと主張する。(Ibid., p. 248.)

人間の勤勉は悉く原産物の生産に使用せらるゝものではない。ジョーンズは、工業に於ける其の増加しつゝある能率が農業の減少しつゝある力を償ひ、且つ償つて尙ほ餘りあることあるを立證する。(Ibid., pp. 248-255.)

リカードは、地主の利益が常に其の社會に於けるあらゆる他の階級の利益と反對するものなるが故にこれを非議する。(Ricardo, An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock, op. cit., p. 20.)

ジョーンズは、彼れが地代増加の原因に關して更らに包括的な見解を取り、而して這般の増加が必然耕作の集中及び改良に隨伴する態様を立證しつゝあつた間に、彼れをして斯くの如き嫌惡す可き學說の不完全なることを論證するを得せしむる資料を蒐集したと稱してゐる。彼れは地主が偶々他の階級の損失に於いて利得することある可き(彼れは特に Mays の文字をイタリック活字を以つて記してゐる)を認める。(Jones, op. cit., p. 287.)

然しながら、彼れは、資本家及び勞働者も亦、往々にして其の社會の自餘の者の其れと相反する利害を有し、地代が生産階級の収入の蠶食によつて高めらるゝことあると等しく確實に、賃銀が利潤の減少によつて増加せしめられ、又、利潤が賃銀の減少によつて膨脹せらるゝことあるは異議なき所であると做してゐる。彼れに従へば、各階級が他のもの、低下によつて擱むことの出来る繁榮は、自然の法則によつて、限られたるものであり、又、不安固なるものである。各々が總べてに共通なるか、然らざれば、少くとも有害ならざる財富増加の泉源から引き得る利益は安全であり、又、其の限界が吾人の經驗若しくは算定の方法を超越せる範圍まで推進せられ得るものである。而して此の點に於いて、地主の社會的地位と國家を構成する他の階級の其れとの間には何等の相違も存せざるものと云ふのが

彼れの結論である。(Ibid., p. 288.)

十一

賃銀學說に於いても亦、リカードの其れは強烈なる非難を受けて、嘗だに市場賃銀論に於いてのみならず、自然賃銀論に於いても亦、需要供給説が主張せられた。而して又、収益説は賃銀基金説の裡に在つて其の發達を見つゝあつたのである。

吾人が他の機會に於いて述べたるが如く、中世に於けるギルドの規定、又は地方長官によつて規制せられた賃銀の統制が破れて、其の決定が次第に市場の自由に委せらるゝこと多きに及んで「生活標準賃銀説」は既に第十七世紀の經濟論者の胸中に潜在せるの觀があつたのであるが、第十八世紀末期に於ける大企業の發生と經濟的自由の實現とに連れて、労働者の地位の上に生じた大變化と結合して現れた資本主義的經濟制度の下に於いて先づ確説せられたものは、マルサスの人口原理を基礎とせるトレンズ及びリカードの生活標準説であつた。洵に其の賃銀學說に於いては、リカードは純然たるマルサス主義者であつた。『社會經濟史學』第一卷第四號所載拙稿「賃銀學說史上の生存費説、賃銀基金説及び収益説」(参照)。然るにマルサス自身は其の『原論』に於いて、アダム・スミスの賃銀論中に存して居つた「需要供給説」並びに其の賃銀基金形態を賃銀の説明に於ける主要なる地位に立たしめ、而して労働者階級の賃銀が其の生活の標準によつて決定せられずして、同階級の生活標準が彼れ等の賃銀によつて主として決定せらるゝことなしとしても、是れによつて深く影響せらるゝことを主張して、生活標準説に對して第

二位の役割を與へた。(William A. Scott, The Development of Economics, 1933, pp. 143-144.)

即ち彼れ曰く「リカード氏は労働の自然價格を定義して、『概して労働者をして其の生存を維持し、而して其の種族を増減なく永續するを得せしむるに必要な價格』であると做した。此の價格を余は眞に最も不自然なる價格と呼ぼうとしなければならぬ、蓋し事物の自然的狀態に於いては、即ち富及び人口の増進に對する大なる障害なくば、斯くの如き價格は概して數百年間生ずること能はざる可きが故である」と。(Principles, 1st ed., 1820, p. 247. 此の章句は一千八百三十六年の再版に於いては「蓋し事物の自然的狀態に於いては、即ち蓄積の増進に對する不自然なる障害なくば、斯くの如き價格は、土壤の耕作若しくは輸出の力が可能なる限度まで推進せらるゝに至るまでは、如何なる國に於いても永遠に生ずること能はざる可きである」と書き改められてゐる。Ibid., 2nd ed., op. cit., p. 223.)。而して彼れは斯くの如き定義に代へて、あらゆる國に於ける労働の自然的若しくは必要的價格を以つて、「社會の現實の狀態に於いて、平均的需要に應ずるに十分なる労働者の平均的供給を生ぜしむるに必要な價格」と做すの定義を提唱せんとしてゐる。而して彼れに従へば、労働の市場價格は、一時的なる諸原因に由つて、時に此の需要を充すに必要な所のもの以上であり、又時に其の以下である市場に於ける現實の價格である。(Ibid., pp. 247-248.)。労働階級の狀態は明かに半ばは其の國の資源及び労働に對する需要が増加しつゝある割合に、又半ばは彼れ等の食衣住に關する其の人民の習慣に依頼する。是れ等の兩原因は變化を免れざるものであつて、又屢々相伴つて變化する。而も猶ほ習慣は資源の増加が同一であつても相違する、而して低劣なる生活法は貧窮の

結果たると等しく其の原因である。(Ibid., pp. 248-249.)

而してマルサスは、人口の急速なる増加に取つて主として(初版は mainly なる文字を用ふるも、再版は essentially と改めてゐる)必要なるものを以つて、勞働に對する大にして持續的なる需要であると觀た。而してこれは其の國の資本及び收入の全價値が年々増加する割合によつて生ぜしめられ、又、之れに比例せしめられる、何とならば、年收益の價値の増加が愈々速かなれば、新たなる勞働を購入する力は愈々大なる可く、而して愈々多くのものが毎年欲望せらる可きである。而して彼れは其の後、此の最後の章句を改めて、「こは、資本より生ずると、收入よりするを問はず、現實に勞働の維持に使用せらるゝ基金の定量及び價値に於ける増加の割合に比例せしめられる」と做してゐる。(Ibid., 1st ed., p. 261; 2nd ed., p. 234.) 而も斯くの如き基金の定量及び價値の基礎的並びに決定的原因に關してはマルサスは殆んど全く説明を與ふることがなかつた。

マルサスの後繼者リチャード・ジューモンズは其の Lectures on Labor and Capital. 及び Text-Book of Lectures on the Political Economy of Nations, delivered at the East India College, Haileybury. に於て「勞働の賃銀は、第一に、勞働者維持の目的に充てらるゝ富の高により、第二に、這般の富の高が分割せらるゝ勞働人口の數によつて決定せらるゝものと做し、勞働維持に充てられたる富の高は世界の勞働基金(the labor fund)を構成し、而して或る一國に於いて斯くの如く充てられたる高は其の國の勞働基金を構成すると説き、(Literary Remains, op. cit., pp. 79, 420.) 而して斯くの如き基金の高を決定する原因を求めて、第一に、土地の地代、第二に地代より離れた

る土地の収益、第三に勞働者の直接支持に充てらるゝ他の階級の收入の投費、第四に、其の所有者に利潤を與ふるを目的とせる節約せられ、蓄積せられたる資本の勞働者に對する前拂ひを擧げた。(Ibid., pp. 420-462.) 彼れは世界の勞働者を三大階級に分ち、其の第一を、耕作農民として其の占有する地所を耕耘し、而して自ら産出しつゝある賃銀に生活する雇傭せられざる勞働者、第二を其の雇主の收入若しくは所得から直接に支拂はるゝ勞働者、第三を其の雇主の資本から支拂はるゝ被傭勞働者と做した。而して彼れは第一の區分が最大であつて、恐らくは世界勞働人口の三分の二を包括するものと觀た。是れ等のものは資本よりして支拂はれざるものである。第二のものも「收入」から支拂はるゝものであつて、資本から支拂はるゝものでない。而してそは彼れの時代に於いても依然として地球面の廣大なる部分に廣がつてゐる。其の賃銀を資本から受ける第三種の被傭勞働者は大體から觀て、恐らく最も少數なるものであらう。唯り英國に於いてのみ、そは徐々に三者中の最も重要なものと爲つたのである。(Ibid., pp. 13-14.) 彼れは英國の經濟學者が専ら此の第三種の被傭勞働者のみを觀たことが、彼れ等をして、世界の勞働人口が給養せらるゝ基本の本質、範圍及び形成に關する重大にして且つ頗る不幸なる誤謬に陥らしめたる原因であると看做した。(Ibid., pp. 14-15.) 彼れは又、勞働者の生存の眞泉源を以つて周圍の顧客の收入なりと做すの學說に觸れてゐる。(Ibid., p. 453.)

而してシイニョアに在つては、賃銀率が支持せらる可き勞働者の數と比較せられたる勞働者支持の爲めの基金の範圍に依頼すると做すの命題は殆んど自明なるの觀があつたのであるが、而も彼れは這般の基金が増加せしめら

れ得る方法を以つて勞働の生産性を増加するに在りと觀たのである。(Three Lectures on the Rate of Wages, 1830, p. iv. 『三田學會雜誌』第二十六卷第十號所載拙稿「賃銀學說史上の收益說」五一九—五二〇頁參照)。而して賃銀基金說の裡に在つて「收益說」及び「生産力說」は極めて徐々に其の發達を見つゝあつたのである。

斯くの如くしてリカード經濟理論の中に潛む階級的對立關係の不可避性と非妥協性とを免れんとするの努力は後人の所謂、英國經濟學の沈滯時代に於いて著々として行はれつゝあつたのである。

エリツヒ・プライザー著「經濟の形態と形成」

氣 賀 健 三

現代の理論經濟學界の狀勢は謂はゞ紛争混亂の狀態を暫く續けて居ると言つてよい様である。其には色々原因があるに相違ないが、其中でも、世界大戰以前と以後との急激な各國經濟狀勢の變化と之に伴ふマルクスマの社會經濟學說の發展とは其重要なるものであると思はれる。現代の經濟學者は一面に於てマルクス主義の學說の征服に腐心し、他面に於て此の渾沌たる各國經濟事情即ち依然として恢復の曙光を見出し得ざる未會有の世界的經濟恐慌を前にして、如何にして之を説明し、如何にして光明ある前途を開拓せんかと苦心努力しつゝ、各人各様の學說を陳述して居るのである。換言すれば個體主義的に經濟組織を解釋する從來の經濟理論が現在の經濟事情を適切に説明し得ず、且つ又之に基いて居ると考へられる自由主義的經濟政策が行詰りの觀を呈して居る爲め、新方針の打開に向つて諸學者が全力を注いで居るのが、現在の經濟學界の狀勢であると言つて差支へないであらう。

此處に紹介するプライザーの書は實に斯様な狀態の中から生れ出た新著の一つである。之は曩に公刊された同氏の著「景氣論要綱」(Grundzüge der Konjunkturtheorie, 1933, Tübingen)の姉妹編を爲すもので、其内容は副題によつて示される通り、經濟學序論に相當すべきもので、經濟及び經濟學の意義に關する一通りの問題が取扱はれて